統 合 分 野

授業科目（必須）	在宅看護目的論	担当教員	
対象学年、開講時期	2年次　前期	単位数（時間）	1単位（15時間）
教科書等	在宅看護論（医学書院）		

ねらい

健康に問題のある高齢者の増加や、生活の場である在宅で過ごしたいという療養者の希望がある。看護を提供する場も変化してきている。そのような中で、地域や対象の生活を視野に入れた真の継続看護の実践が求められている。在宅看護が制度として成り立った過程を振り返り、人々のニーズと社会情勢から現在の在宅看護について学ぶ。また、在宅看護は訪問看護師の判断・責任を問われる援助も多い。在宅看護をめぐる保健医療制度も関連づけて学ぶ。

目標

1. 在宅看護の目的と特徴を理解する。
2. 在宅看護の変遷と現状を理解できる。
3. 在宅システムにおける看護の役割が理解できる。
4. 在宅看護をめぐる保健医療制度について理解できる。

授業内容

1. 在宅看護の変遷と現状
   1）医療保健福祉の変化
   2）在宅看護が必要とされる背景
2. 在宅看護の目的と特徴
   1）在宅看護の目的
   2）施設内看護と在宅看護の機能の相違と特徴
3. 在宅ケアシステムにおける看護の役割
   1）ケアマネジメントと看護の役割
   （1）ケアマネジメントとは
   （2）社会資源の理解と活用
   （3）介護保健とケアマネージャー
   2）チームケアの重要性、他職種との連携
   （1）専門職メンバーとその役割
   （2）専門職メンバーとの連携のポイント
4. 在宅看護をめぐる保健医療制度
   1）訪問看護と法律
   （1）健康保険法　（2）介護保険法　（3）総合自立支援法
   （4）診療報酬　（5）保健師助産師看護師法および医師法
5. 在宅看護における倫理的課題
6・在宅看護の課題および展望

方法

講義

評価

単位時間終了後筆記試験行う。

授業科目（必須）	在宅看護対象論	担当教員	
対象学年、開講時期	2年次　前期	単位数（時間）	1単位（15時間）
教科書等	在宅看護論　（医学書院）		

ねらい

在宅看護の対象はあらゆる年齢階層にわたり、その対象をとりまく条件や環境は多岐にわたり、在宅看護においては、対象をとりまく家族・社会から、対象を理解することが重要となる。

様々な在宅療養者の特徴と家族への在宅看護の実際を学び、興味関心を高める。さらに、対象のQOLを維持し高めるために、多職種と連携・協働しながら、看護の役割を果たすことができるような基礎的知識を学ぶ。

学習目標

1. 生活の場である地域環境の中で療養する対象を理解する。
2. 家族看護アセスメント視点をふまえ、家族看護の看護者の役割を理解する。
3. 在宅療養者の生活を支える社会資源を理解する。
4. 継続看護のための看護者の役割を理解する。

授業内容

1. 在宅看護の対象とその生活
   1）在宅看護の対象　；⑴疾病を持つ人と家族　⑵障害を持つ人と家族　⑶生活自立が困難な人と家族
   2）対象者の特徴　；⑴年齢からみた対象者の特徴　⑵疾患からみた対象者の特徴　⑶障害からみた対象者の特徴
   3）在宅看護の対象者としての家族
   4）対象者の生活
2. 家族と家族介護者の理解及び健康支援
   1）家族のとらえ方
   2）家族介護者のアセスメント
   3）家族関係の調整
   4）介護方法の指導
   5）家族介護者の健康
   6）レスパイトケア
3. 在宅療養者の住環境
   1）住環境の意義と特長
   2）住環境調整の基本
   3）住環境調整の看護師の役割
4. 継続看護
   1）退院支援・退院調整
   2）施設と在宅療養をつなぐ継続看護

授業方法

講義

評価方法

単位時間終了後筆記試験行う。

その他

家族とその暮らしぶりを理解するうえで、家族社会学・生活科学の住環境などの知識を基にして学習が進みます。

授業科目（必須）	在宅療養者と家族の健康と生活を支える看護	担当教員	
対象学年、開講時期	２年次	単位数（時間）	１単位（３０時間）
教科書等	在宅看護論 （医学書院）		

ねらい

在宅看護での日常生活の援助は、療養者および家族の生活へのQOLを考え側面的に関わる援助が必要である。療養者やその家庭にあった生活援助の工夫を考え、安全・安楽であることを基本に在宅看護技術の特徴を学ぶことを目標とする。在宅看護で接することの多い疾患についてその特徴、アセスメント、ケアについて学ぶ。

目標

1. 在宅看護の基本となる援助方法が理解できる。
2. 地域で療養する主な疾患・症状の特徴とそれに伴う在宅ケアを理解できる。
3. 在宅看護における看護過程の特徴を理解できる。
4. 在宅療養におけるリスクマネジメントの必要性を理解できる。

授業内容

1. 在宅看護技術の特徴と方法 （6H）
   1）在宅看護技術の原則
   2）在宅看護面接・相談技術
   3）家族への援助方法
   4)生活の中で必要となる安全管理
2. 在宅における日常生活支援の方法および介護用品の工夫 （4H）
   1）食事　　2）排泄
   3）清潔　　4）移動
3. 在宅における医療管理を必要とする人への看護（日常生活上の注意・社会資源の活用等）（10H）
   1）在宅酸素療法
   2）在宅人工呼吸療法
   3）膀胱留置カテーテル法
   4）在宅経管栄養・経腸栄養法
   5）在宅中心静脈法
   6）在宅褥瘡管理
   7）服薬管理
4. 在宅療養者の状態別看護（8H）
   1）痴呆性高齢者
   2）難病による療養者
   3）生活自立困難者
   4）精神障害のある療養者
   5）感染症のある療養者
5. 在宅におけるターミナル期の看護(2H)

方法

講義・事例を基にした演習・ロールプレイ・VTR

評価

単位時間終了後筆記試験行う。

その他

在宅看護は、信頼関係の構築から援助が始まります。また、療養者は、年齢層も 様々であり、医療管理を必要とした人も増加しています。人間関係論及び各看護学と関連して学びましょう。

授業科目（必須）	在宅看護論演習	担当教員	専任教員
開講時期、対象学年	3年次　前期	単位数（時間）	1単位（30時間）
教科書等	在宅看護論　（医学書院）		

ねらい

在宅看護の技術は、基礎看護学を応用し、在宅にある物品を使用(工夫)しながら援助することが多々ある。在宅看護における基本的な日常生活援助について学び、その多様性を意識する。(食事、清潔、排泄、移動)また、屋内・屋外の環境、福祉用具について考える。さらに、在宅看護における基本技術を通して、療養者と家族、継続看護について考える。

目標

1. 在宅看護における日常生活の援助技術を習得できる。
2. 在宅療養の場における社会資源の活用方法を理解できる。
3. 在宅看護の特徴をとらえ、事例展開ができる。

授業内容

1. 在宅看護における日常生活援助技術
   1)洗髪・足浴・清拭・口腔ケアの工夫
   2)服薬管理の工夫
2. 地域におけると社会資源とその活用
   1)地域と住まいのユニバーサルデザイン
   2)社会資源の活用の実際
3. 在宅におけるヘルスアセスメントの実際
4. 在宅療養者の看護過程の展開

方法

事例展開　・技術演習　・　シュミレーターを活用した演習　・福祉機器見学

評価

演習事例展開・演習参加状況　（　評価基準は別に定め事前に説明する）

その他

在宅での技術は、基礎看護学を応用し、在宅にある物品を活用して援助や指導内容を工夫し応用することです。

授業科目（必須）	地域で生活する人々の看護実習	担当教員	専任教員
開講時期、対象学年	３年次	単位数（時間）	２単位（90時間）
実習場所	保健所・保健センター　介護老人福祉施設・介護老人保健施設　訪問看護ステーション		

ねらい

地域の中で療養する人々やその家族を理解し、在宅における看護の機能と役割の実際について学ぶ。

目標

1．保健所・保健センターにおける保健活動を見学し、地域の特徴を活かした保健活動と看護職の果たす役割を学ぶ。

2．介護保険制度における施設サービス・地域密着型介護予防サービス・地域包括支援センターなどを利用する高齢者への支援のあり方を学ぶ。

3．在宅療養者と家族の生活にふれ、また訪問看護の実際を経験することによって、地域における訪問看護の役割を理解する。

実習内容

1. 保健所・保健センターの保健活動における保健師業務の実際
2. 保健所・保健センターの事業活動の取り組み
3. 介護老人福祉施設、ディサービスセンター、地域包括支援センターなどの法的位置づけとそのサービスの実際
4. 認知症高齢者個々に応じたコミュニケーションの取り方
5. 生活の安全、快適に過ごせるための援助
6. 地域の高齢者を支える人々の連携の実際
7. 施設や在宅で安らかな死を迎えるための援助のあり方
8. 在宅における援助方法
9. 在宅療養者が活用している社会資源
10. 保健医療福祉チームとの連携

実習方法

・保健所・保健センターの1日見学実習（6H）（まとめの会2H）

・特別養護老人ホーム・地域包括支援センター・ショートスティサービス、ディサービスセンターで、各2日間見学実習（32H）（カンファレンス・学習のまとめ8H）

・訪問看護ステーションにて2週間（４～６日間）の体験実習（42H）

･オリエンテーション（1H）　学内実習

評価

実習参加態度、記録物、カンファレンスなど総合的に評価する。

その他

原則として、「看護過程展開の基礎実習」、「在宅看護目的論」、「在宅看護対象論」、「在宅療養者と家族の健康と生活を支える看護」、「在宅看護論演習」の履修が必要である。

授業科目（必須）	災害看護	担当教員	
対象学年、開講時期	2年次	単位数（時間）	1単位（30時間）
教科書等	災害現場でのトリアージと応急処置 （日本看護協会出版会） 写真でわかる 急変時の看護 （インターメディカ）		

ねらい

災害医療及び災害看護の基本的知識・技術を理解するとともに、災害看護に必要な基礎的能力を養う。

災害時の国際協力について学び、国際社会において、広い視野で看護師としての国際協力を考え

目標

1. 災害医療の概念について理解できる。
2. 災害看護の目的と看護師の役割が理解できる。
3. 災害看護活動の内容が理解できる。
4. 災害時に必要な基本的技術を理解できる。

授業内容

1. 災害医療の概念
   1）災害の歴史と災害医療
   2）災害医療対策
   3）災害の種類別の被害の特徴
   4）災害種類別の疾患の特徴
   5）トリアージ
2. 災害看護の目的と特徴
3. 災害における看護の役割
4. 災害看護活動
   1）災害看護活動への個人としての心構え
   2）災害急性期における看護の役割
   3）災害中長期における看護の役割
   4）被災者と救援者の心のケア
5. 災害時の国際協力
6. 災害時に必要な基本的技術（演習）
   1）トリアージ
   2）災害急性期における看護の役割トリアージの沿った応急処置及び搬送準備
7. 災害時のボランティア活動
8. 救命救急の看護技術
   1）救急医療と看護
   2）心肺蘇生法
   3）包帯法

方法

講義　演習

評価方法

筆記試験

その他

授業科目（必須）	医療安全	担当教員	
対象学年、開講時期	2年次	単位数（時間）	1単位（30時間）
教科書等	系看　統合　医療安全　看護の統合と実践②　（医学書院）　、医療安全ワークブック（医学書院		

ねらい

人間の尊厳と生命の安全を守る看護者としての責任を果たし、安全な看護を提供するための基礎的能力を養う。

目標

1. 医療安全についての基礎的知識が理解できる。
2. 医療安全における看護職の責任について理解できる。
3. 医療におけるリスクマネジメントと事故予防のための組織的取組の必要性が理解できる。
4. 医療安全のための看護の基本が理解できる。
5. 診療補助業務における医療安全のためのアセスメントの視点が理解できる。
6. 療養上の世話における医療安全のためのアセスメントの視点が理解できる。
7. 医療安全のためのリフレクションの必要性が理解できる。
8・自己の言動を洞察し、ヒューマンエラーにおける自己の特徴的傾向が理解できる。
9. 演習を通し療養上の世話における医療事故予防の視点が理解できる。

授業内容

1. 医療事故及び安全の基盤となる考え方
   1）医療における安全
   2）医療事故の概念
   3）ヒューマンエラーの概念
   4）自己の分析とハインリッヒの法則
   5）組織事故の発生と拡大
   6）メタ認知と自己モニタリング
   7）医療における患者の安全確保
2. 医療安全に関する看護職の責任と法的責任
   1）保助看法による業務範囲
   2）医療事故予防のためのアサーティブの力
   3）医療事故予防の根幹となる看護倫理
3. 医療事故予防のための医療と看護システム
   1）リスクマネージメントの考え方
   2）安全管理のためのシステム
   3）医療事故予防の組織的取り組み
4. 医療事故予防と看護の方法
   1）安全を守る知識・技術
   2）事故防止のための専門的知識と看護技術の習熟
   3）事例から学ぶ手法
   4）医療事故と事故後の対応
5. 医療事故予防と看護実践
   1）危険の情報収集
   2）危険因子のアセスメント能力
   3）危険の予測
   4）危険を回避した看護実践
   5）看護実践の評価
6. 医療安全におけるリフレクション
   1）実習場面でのインシデント・アクシデントレポートの検討
7. ヒューマンエラーに対する自己の傾向

方法　　講義・ロールプレイング・模擬患者を用いた演習

評価

筆記試験

その他

診断や治療にかかわる技術を健康障害と連動させて学習する。

授業科目（必須）	看護研究の実際	担当教員	専任教員
対象学年、開講時期	３年次	単位数（時間）	1単位（15時間）

ねらい

看護研究の基礎的知識をもとに、看護の実践を通して、対象者に対する看護の働きかけがどのような効果をもたらすのかを研究のプロセスを踏みながら実施する。さらに、まとめ方・発表のしかた・講評を体験する。

また、ケーススタディをまとめることで、自分が行った看護を振り返るとともに、看護に対する考えを深める。

目　標

1. 論文としての形式をふまえて、ケーススタディをまとめることができる
2. 研究発表に必要な準備を行い適切な発表ができる
3. 看護研究に取り組むことにより、看護の目がますます深まっていくことが実感できる
4. 看護学的知識をよりよく理解するための、研究的態度を身につける
5. 看護研究における倫理的配慮ができる。

授業内容

1. ｹｰｽｽﾀﾃﾞｨのまとめ方
2. ３年前期における看護実習において、１事例のケーススタディをまとめる。
3. ｹｰｽｽﾀﾃﾞｨの発表会で発表、講評、座長を体験する。

方法

実習で受け持った患者１事例論文作成

研究発表会（発表者、座長、講評の体験）

評価方法

論文作成状況　論文　発表態度　等(評価基準は別に定め事前に説明する)

その他

専門職である看護師は、対象者によりよい看護を提供するために、看護上問題になっていることを解明し、よりよい方法をみいだす必要があります。そのためには、様々な研究が必要です。研究の基礎的な知識を学び、看護実践を振り返り、研究的視点で分析、考察していくことにより、研究的に臨む姿勢を身につけましょう。さらに、ｹｽｽﾀﾃﾞｨをまとめることにより、看護に対する考えを深めましょう。

授業科目（必須）	看護の統合と実践	担当教員	専任教員
対象学年、開講時期	3年次後期（総合実習前）	単位数（時間）	1単位（15時間）
教科書等			

ねらい

既習の知識、技術を用い統合し、実践する能力を養う。
多重課題の解決のための優先順位の考え方、タイムマネジメント、医療安全の視点をもって総合的に実践する能力を養い、看護マネジメントの基礎的能力を養う。

目標　1. 複数の模擬患者の各々に必要な日常生活援助を計画できる。

2. 多重課題の解決のための適切な判断および対処について考えることができる。

3. 自己の看護技術の修得状況を把握し、課題を明確にする。

内容　1. 複数患者を受け持ち、優先順位を考えた1日の行動計画を立案する

2. 計画に沿った看護実践中に起こる割り込み状況に対し、自己の対応能力を認識した上で対処方法を判断する

3. 自己の看護実践能力に応じ、チームメンバーと連携し（連絡・報告・相談、協力依頼等）しながら、状況に応じた看護ケアの実践

4. 複数患者の看護実践を振返る。割り込み状況を含め、どうすればよかったか、医療安全、倫理的行動、自己の臨床実践能力等の視点から分析する

5. 事例に対する看護実践を振返り自己の課題を見いだす

6. 看護管理の実際

方法　複数患者の事例の看護計画を立案する。

シミュレーション演習

転倒しやすい患者に排泄を頼まれた場面、点滴が終了直前の患者に声をかけられた場面　等

実施後リフレクションを行い、体験から自分の考え、行動を意識化し、気づきを共有する

評価

看護技術の総合評価

グループ演習の参加状況

評価基準は別に定め事前に説明する

その他

授業科目（必須）	臨床総合実習	担当教員	専任教員
対象学年、開講時期	3年次後期	単位数（時間）	2単位（90時間）
実習場所	東京山手メディカルセンター　　病棟		

目的

1. 複数患者の看護や一勤務帯を通した患者の看護の体験を通し、あらゆる状況に安全に対応できる、看護の基礎的能力を養う。
2. 看護チームの一員としての役割を体験し、看護専門職としての役割と責任を自覚し、看護をマネジメントできる基礎的能力を養う。

目標

1. 複数患者を受け持ち、優先すべき情報収集や看護問題、看護の援助方法を理解する。
2. 看護チームの看護管理やリーダーシップ、メンバーシップを理解し、チームの一員であることを自覚し、責任をもって行動できる。
3. 医療チームのなかで他職種と協働しながら、看護の役割について理解できる。
4. 就寝までの夜間帯の実習を通して24時間の患者の生活と看護の継続を理解できる。
5. 夜間帯の看護体制の中で看護師が患者の安全・安楽を守るためにどのように連携しているかを知る。
6. 自己の看護行動を倫理綱領に照らして振り返ることができる。
7. これまでの学習を振り返り、将来の看護師としての自己の課題を確認できる。

内容

1. 複数の受け持ち患者個々の状態（健康状態、看護計画、治療、検査など）
2. 複数患者の看護の優先順位の考え方
3. 複数の受け持ち患者への看護実践
4. 看護組織システム
5. チームリーダー、チームメンバーの役割と実践
6. 適切な時期、適切な人への報告、連絡、相談
7. 他職種との連携の重要性と方法
8. 夜間の看護
9. 看護専門職としての責任と自己の課題

方法

1. 同看護チームの患者を同時期に2名受け持ち、病棟で立案されている看護計画にそって看護師と共に看護を実践する。
2. 病棟科長と行動を共にし、看護管理の実際について学ぶ。
3. チームリーダー、チームメンバーと各々1日行動を共にし、リーダシップ、メンバーシップについて学ぶ。
4. 医師、薬剤師、管理栄養士などの他職種や専門看護師、認定看護師と連絡相談報告の実際を見学する。
5. 夜間の看護を体験する（ケアは原則単独では実施しない）
6. 看護者の倫理綱領にそって自己の看護行動を評価し、自己の課題を明確にする

評価方法

実施内容、記録物、カンファレンスなどへの参加度で評価する。（評価基準は別に定め事前に説明する）

その他

原則として、専門分野Ⅰの臨地実習、専門分野Ⅱの臨地実習の履修および「看護の統合と実践」の受講が必要である。